

## 神の栄光と人の救い

### 第3回 人の墮落とサタンの関係

#### はじめに

#### 1. 学びの目的

- (1) 「神のご計画の中心は、神の栄光である」と言われます。
- (2) では、神の栄光とは何のことでしょうか。また、私たちは、神の栄光とどのような関係にあるのでしょうか。特に、福音を人々にお伝えするときに、私たちが聖書を開いて、神の栄光と人の救いとの関係をわかりやすく、聖書のことばから説明できるようにしたいと思います。

#### 2. 扱うテーマは、次の4つです。

- (1) 天地創造の目的
- (2) 人が造られた目的とサタンの起源
- (3) 人の墮落とサタンとの関係
- (4) 人の救いとメシアとの関係

#### 3. 前回までに2つのテーマを扱い、そこから導かれる結論は、次のとおりでした。

- (1) 天地が造られた目的は、神がご自身の住まいとするためです。創世記には直接的な記述はありませんが、旧約聖書における神の住まいの変遷と黙示録の新天地の預言から、そのことがわかります（黙示録 21：1～3）。
- (2) 最初の地には、宝石で満ちたエデンの園（エゼキエル 28：12）があり、その支配者は天使の長でした。
- (3) その天使の長が、自ら神の地位に着こうと思い高ぶり、悪の起源となりました。この者が、サタン（悪魔）です。サタンは、天使の三分の一を配下に引き入れました。彼らが、悪霊です。参照箇所は、エゼキエル 28：16 と黙示録 12：4 です。
- (4) 天使の長がサタンになったときに、最初の地は呪われ、創世記 1 章 2 節「地は荒漠として何もなかった。やみが大水の上であり、」という状態に陥りました。宝石で輝いていたエデンの園も失われました。
- (5) 神は、地を修復されました。そして、地の上に、新しいエデンの園を設け、そこに人を造って置かれました。このエデンの園には、「見るからに好ましく食べるのに良いすべての木々」が生え、「一つの川が、この園を潤して」いました（創世記 2：9～10）
- (6) 人は、神に似せて、神のかたちに造られました（創世記 1：26）。「かたち」というヘブル語の原語は、ダニエル 2：32 でも使われ、そこでは「像」と訳されています。神のかたちとは、何でしょうか。人はその後、墮落してしまって、本来の人の在り方を失いましたので、創世記からはよくわかりません。預言書などから本来の姿を回復したときの人の姿を見ると、ヒントになります。

- ① 黙示録 21 : 22~26 諸国の王と民が、彼ら自身の栄光を携えて都にやってきます。神が光り輝くお方であるように、人も、本来は、神の栄光を受けて、自らも光り輝く者となるように造られたのではないのでしょうか。ダニエル 12 : 3 やマタイ 13 : 43 には、人が輝くという預言があります。
  - ② I ペテロ 1 : 3~4 神の栄光と徳を受けて、人は神のご性質にあずかる者となります。栄光は徳を伴います。神の栄光と徳によって、人は内面的にも神に似た者、神の像となります。
- (7) 神の栄光と人との関係を端的に表現しているのは、次の二つです。
- ① まことの光 (黙示録 21 : 23、ヨハネ 1 : 9)
  - ② いのちの光 (ヨハネ 1 : 3~4、詩 36 : 9)
4. 今回は、3 番目のテーマ「人の墮落とサタンの関係」です。アウトラインは次のとおりです。

#### 今回のアウトライン

1. 人の墮落と死について
2. 三つの死
  - (1) 霊的な死
  - (2) 肉体の死
  - (3) 第二の死 (永遠の滅び)
3. 三つの死とサタンの関係
4. サタンの力の限界と悪霊の追い出し
5. 救いへの道備え

## 人の墮落とサタンの関係

### 1. 人の墮落と死について

- (1) 人は本来、神の栄光を受けて、外面的にも内面的にも光り輝く者になるように造られました。サタンの策略にかかって、エデンの園での唯一の禁止令を破ってしまいました。その結果、神の栄光を受けることができなくなりました。これを「人の墮落」と言います。
- (2) 神の栄光は、人にとって、まことの光、いのちの光ですから、それから離れることは、いのちを失うこととなります。それが死であり、その特徴は「分離」です。分離は三つの段階を経て進行します。従って、聖書では「死」は三つあります。
- ① 神の光からの分離 → 霊的な死 (エペソ 2 : 1)
  - ② 霊魂と体との分離 → 肉体の死 (ヘブル 10 : 27)
  - ③ 神からの永遠の分離 → 第二の死 (黙示録 20 : 14)、火の池 (ゲヘナ)
    - ヨハネ 5 : 29 後半 悪を行った者は、よみがえってさばきを受ける
    - マタイ 10 : 28 たましいもからだも、ともにゲヘナで滅ぼす

### 2. 三つの死

#### (1) 霊的な死

- ① 霊的な死というのは、人の霊魂が全く動かなくなるわけではなく、人の霊魂の機能である意志・知性・感情のいずれも機能不全になって、欲望をコントロールできなくなる状態です (エペソ 4 : 17~19)。
- ② 自分の欲望を満たすことが第一 (エペソ 2 : 3) なので、そのような人は、神の光を憎み、神の光の方に来ない (ヨハネ 3 : 20) という特徴があります。この状態の人を、聖書では「罪人 (つみびと)」と言います。
- ③ 最初の人アダムが罪人となって以来、その子孫である私たちは、全員がこの状態で生まれてきます。ですから、人は、全員が「罪人」です (ローマ 3 : 10~18)。
- ④ 罪人は、神の栄光を受けることができません (ローマ 3 : 23)。
- ⑤ 人の霊魂は、その中に「良心」をもっています。ここには、神の道徳律がインプットされており、人が為すべきこと、してはならないことの分別は可能です (ローマ 2 : 14~15a)。しかし、分かっているけれど、できません。人の欲望の前には、良心も無力です (ローマ 2 : 15b、3 : 19)。
- ⑥ 霊的に死ぬと、やがて霊魂は肉体から分離する時を迎えます。これが肉体の死です (詩 146 : 4)。

#### (2) 肉体の死

- ① 肉体から霊魂が分離すると、肉体は活動を停止し、土に戻ります (創 3 : 19)。
- ② 肉体から分離した霊魂は、消滅しません。

- ③ 罪人の靈魂は、ハデスの中の「苦しみ場所」と呼ばれる所に下ります (ルカ 16:23)。
- ④ そこに行ったら、先に亡くなった親族や知人に会えるというようなものではありません。一人ひとりが孤独で、熱く渇きに苦しむ時を過ごさねばなりません。
- ⑤ 肉体の死を迎える前に、神のことばを信じて救いを受け取る人がいます。そういう人を「信者」といいます。信者の靈魂は、パラダイスに行きます (ルカ 23:43)。
- イエスの復活と昇天までは、パラダイスは「地の中」(マタイ 12:40、エペソ 4:9) にありました。これは、ハデスの中です。別名「アブラハムのふところ」又は「慰めの場所」と呼ばれました。
  - ですから、日本語では「よみ」とか「地獄」と訳されるハデスですが、罪人が行く苦しみ場所と、信者が行く慰めの所とに二分されていたわけです。
  - イエスが復活した直後、天に昇ったときに、パラダイスにいた旧約時代の信者たちは、イエスに伴われて天に移されました (エペソ 4:8、詩 68:18、26~27)。
  - そのため、今は、パラダイスは天にあります (II コリ 12:2~4)。
- ⑥ 信者がよみがえって、イエスの復活体と同じ栄光の体を受けるのは、順番があります。
- 新約時代の信者たち・・・教会の携挙のとき (このときに地上に残っている信者たちは、肉体の死を通過しないで、栄光の体に変換されます。これは、復活ではなく、変換という出来事です。)
  - 二人の証人・・・大患難期の中間期のとき。二人は大患難期の前半期 3 年半をエルサレムにいて伝道活動をしますが、反キリストによって殺されます。しかし、3 日半の後に復活し、天に上げられます。これは、イエスが語った「ヨナのしるし」の 3 番目です。
  - 旧約時代の信者たちと大患難期に信じて死んだ (ほとんどが殉教死と思われる) 信者たち・・・イエスの地上再臨の後、千年王国の始まる前 (このときに、地上に残っている信者たちは、そのままの肉体で千年王国に入ります。そして肉体の死を経験することなく、100 歳を過ぎた時点で栄光の体に変換されます。)
- (3) 第二の死 (永遠の滅び)
- ① 千年王国が終わると、罪人の靈魂はよみがえって新しい体を与えます。
  - ② よみがえって新しい体を受けるといっても、神の国に入れるというような喜びに向かうわけではありません。神のさばきの座に出ることになります。それ

が「大きな白い御座のさばき」、いわゆる最後の審判です。

- ③ 罪人は、この審判において、肉体にあったときの行いに応じて裁かれます。この判決で、無罪になる人や、有期刑になる人はいません。全員が永遠の刑罰です。火の池での苦しみの軽重のみが、「行いに応じて」決まります。
- ④ 最後の審判の結果、罪人は「火の池」に投げ込まれ、永遠に苦しむこととなります。

### 3. 三つの死とサタンとの関係

#### (1) 霊的な死とサタンとの関係

- ① サタンの策略で、人は神から命じられて唯一の禁止令を犯しました（Ⅱコリ 11：3）。
- ② そのとき、サタンに由来する「罪」が人の中に入りました（ローマ 5：12）。
- ③ 「罪」とは、「神に従わない」という暗やみの力です（エペソ 6：12）。自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行おうとする力です（エペソ 2：3）。
- ④ この罪は、サタンに由来します（ヤコブ 1：13、ヨハネ 6：44b）。
- ⑤ 罪に入られた人は、サタンの支配下に陥りました。いくつかの表現があります。
  - 悪魔の子 ヨハネ 6：44a
  - 罪の奴隷 ローマ 6：12、16～21、ヘブル 2：15
  - 暗やみの圧制 コロサイ 1：13
  - 神の敵 コロサイ 1：21
- ⑥ サタンは、「空中の権威を持つ支配者として、今も不従順な子らの中に働いている霊」（エペソ 2：2）です。サタンは、人がますます情欲のままに生活するように仕向けます（ヤコブ 1：14～15、4：2）
- ⑦ 悪霊は、人を神以外のものに依存させるようにします。占いや偶像崇拜は悪霊によるものです（使徒 16：16、Ⅰコリ 10：20）。

#### (2) 肉体の死とサタンとの関係

- ① 罪人はサタンの支配下にあります。彼ら一人ひとりの死の時期を決めるのはサタンです（ヘブル 2：14）。
- ② これに対して、信者のいのちと死は、神の御手のうちにあります（ヨブ 1：10、2：6）。新約の聖徒は、明確に、信じたときに御子イエスの支配下に移されると言われています（コロ 1：13）。
- ③ もし、信者がことさらに罪を犯し続けると、神の御手のうちからサタンに引き渡されることがあります。ただし、救いは失われません（Ⅰコリ 5：5）。

#### (3) 第二の死とサタンとの関係

- ① この段階では、サタンは「この世を支配する者」（ヨハネ 14：30）ではなくなっており、裁かれる立場です。

- ② 大きな白い御座のさばき（いわゆる、最後の審判）の前に、サタンは火の池（ゲヘナ）に投げ込まれます（黙示録 20 : 10）。
- ③ その後、罪人たちがよみがえって裁きを受け、火の池に投げ込まれます。
- ④ サタンと悪霊、そして罪人たちは、永遠に苦しみを受けることになります。
- ⑤ このように、神のご計画は、人の救いだけでなく、サタンと悪霊たちの処罰も、神のご計画の中の重要な一部です。

#### 4. サタンの力の限界と悪霊の追い出し

##### (1) サタンや悪霊の力の限界

- ① サタンは、「この世を支配する者」（ヨハネ 14 : 30）と呼ばれますが、真の神ではないので、普遍的に存在することはできません。したがって、ある特定の人に入るということは、よほどの必要性がない限り、しません。その例外的特殊事例は、聖書では 1 回、イスカリオテのユダに入りました（ヨハネ 13 : 27）。
- ② サタンの活動は、大きな枠でとらえると神の支配下にあります。ヨブ記に見るとおりです。
- ③ 神は、サタンの誘惑すら、信者の訓練のために用いて（ヤコブ 1 : 13、ヘブル 12 : 7）、益に変えてくださいます（Ⅱコリ 2 : 10～11、ローマ 8 : 28）。
- ④ サタンや悪霊たちがどんなに力ある者であっても、物理的な力を行使して直接、人に危害を加えることはできません。例外は、大患難期に神の裁きのために用いられる次の悪霊たちだけです。
  - 「いなご」（黙 9 : 3）<sup>4</sup>・・・額に神の印が押されていない人間だけに害を加える。人間を殺すことは許されず、5 か月の間、さそりが人を刺したときのような苦痛を与える。
  - 「つながれている四人の（墮）天使と二億の騎兵」（黙 9 : 14～<sup>18</sup>16）・・・人類の三分の一を殺す（生き残った人々ですら、深い罪の中にある＝黙 9 : 20～21）
- ⑤ 悪霊が物質の世界に直接的に関与した特殊な事例は、創世記 6 章の人類の女との雑婚をした悪霊たちだけです。この悪霊たちは、おるべき領域を捨てたとして永遠の束縛の刑罰を受けています。ハデスの中のタータラスと呼ばれる領域に閉じ込められていて、最後の審判のときにハデスごと火の池に投げ込まれます。

##### (2) 悪魔の策略

- ① サタンの活動の主な内容は、誘惑すること（マルコ 1 : 13、ルカ 4 : 13）、試みること（マタイ 4 : 3、ルカ 4 : 2）、訴えること（ゼカリヤ 3 : 1、黙 12 : 10）です。人に罪を犯させ、それを口実に神の前に人を有罪として訴えることです。サタンは、神が人を愛していることを知っており、人を人質にとって神の裁き

を免れようとしているのでは、と推定されます。

- ② サタンの攻撃における重点目標は、神の民であるイスラエルです。イスラエル民族を地上から抹殺することが、サタンの最重要課題です。歴史上繰り返されてきたユダヤ人への迫害は、その背後にサタンがいます。イスラエルが民族的に存在を続け、いつの日か悔い改めてメシアを受け入れると、地上にメシアの王国が到来し、サタンの支配は終わるからです。
  - ③ 異邦人に対しては、「この世の神」（Ⅱコリ 4：4）と呼ばれる配下の悪霊たちが担当の国や民族を決めて組織的に活動しているものと考えられます。その活動の内容は、「神のかたちであるキリストの栄光にかかわる福音の光を輝かせないようにする」ことです。
- (3) 悪霊の追い出し
- ① 悪霊が霊的に人体に入る、いわゆる悪霊に憑かれたという状態に人が陥ることがあります。
    - イエスは、十二弟子に「汚れた霊どもを制する権威をお授けになった」。この十二弟子には、信者ではないイスカリオテのユダも含まれることに注意。
    - 汚れた霊を制するとは、「霊どもを追い出し、あらゆる病気、あらゆるわずらいをいやす」こと
    - このような権威が授けられた目的は、御国の福音を宣べ伝え、イエスをメシアであると証しするため（マタイ 10：35～38）
    - イエスが別に 70 人を定めて、ふたりずつ町や村に先にお遣わしになったときも、彼らは「イエスの御名を使うと、悪霊どもでさえ、私たちに服従します」という体験をした（ルカ 10：1～20）
  - ② イエスが十一人の使徒たち（全員が信者）に告げられた大宣教命令の中に、悪霊の追い出しがあります。
    - 「信じる人々には次のようなしるしが伴います。すなわち、わたしの名によって悪霊を追い出し、新しいことばを語り、蛇をもつかみ、たとい毒を飲んでも決して害を受けず、また病人に手を置けば病人はいやされます。」（マルコ 16：17～18）
    - そして実際に、「主は彼らとともに働き、みことばに伴うしるしをもって、みことばを確かなものとされた」（マルコ 16：20）
    - その具体的な記録が「使徒の働き」です。
  - ③ 「使徒の働き」の中に、不信者が悪霊に憑かれていて、それを使徒パウロが追い出した事例があります。
    - 占いの霊に憑かれた女奴隷（使徒 16：16～18）。宣教活動を執拗に妨害したので、パウロはやむなく悪霊の追い出しをしました。

- ④ 悪霊の追い出し＝通常の方法（パリサイ派のラビでも同様のことをした）
- 「おまえの名は何か」と悪霊の名を聞き出す（マルコ 5：9）
  - 悪霊の名を呼び、「汚れた霊〇〇よ。この人から出て行け。」と命じる。
- ⑤ イエスの方法
- 悪霊の名前を聞き出さない。いきなり「黙れ。この人から出て行け」（マルコ 1：25）
  - すると、その汚れた霊はその人をひきつけさせ、大声をあげて、その人から出て行った（マルコ 1：26）。
  - 人々はこれを見て驚き、「これはどうだ。権威のある、新しい教えではないか。汚れた霊をさえ戒められる。すると従うのだ。」（マルコ 1：27）
- ⑥ 特殊な悪霊（口をきかなくする霊）に対する場合
- 悪霊の名を聞き出してその名を呼ぶことができない。ゆえにイエス公生涯の時代においては、ユダヤ人たちの間ではメシアだけがそのような悪霊を追い出すことができると言われていた。いわゆる、メシア的奇跡。
  - イエスは、悪霊に憑かれた人がいつから、どういう状況のときに悪霊に憑かれたのか、悪霊に憑かれるとどのようなになるのか、といったことを確認しました。これは、後代になってこの出来事を聖書によって読む私たちのために、イエスが質問しておられるように感じます。現代的適用をすれば、悪霊に憑かれた原因が占いや偶像崇拜、霊媒・口寄せによるものでないことを確認する必要があるのだと思います。この点はあとで述べます。
  - イエスは、口をきけなくする霊のときも、悪霊の名を尋ねることをせず、汚れた霊をしかって言われました。「口をきけなくし、耳を聞こえなくする霊。わたしがおまえに命じる。この子から出て行け。二度とこの子に入るな。」（マルコ 9：25）
  - メシア的奇跡ではありますが、弟子たちには「信仰があれば、できる。ただし、この種のものは、祈りと断食によらなければ出て行かない」と教えられました（マタイ 17：19～21）
- ⑦ 現代でも悪霊に憑かれた人は見受けられます。
- もし、本人または家族から教会に相談があった場合は、まず、その人が占いや偶像崇拜、霊媒や口寄せと関係しているかどうかを確認しましょう。本人だけの問題でないこともありますので、その人の家庭環境や職場環境などもチェックします。モーセの律法では、イスラエル人に限らず、在留異国人も含めて、占いなどをする者とは関わらないように教えているからです。
  - もしそのような問題があれば、まず占いや偶像崇拜をやめる、霊媒や口寄

せとの関係を断つ、といった対応を勧告します。それを本人や家族が拒むなら、教会は彼らとそれ以上関わりません。

- 占いのような問題がなく、本人または家族から悪霊の追い出しを求められたら、長老たちは祈りと断食によって備えます。そして、悪霊の追い出しをすることが適切であると長老たちの意見が一致したら、悪霊の追い出しを実行します。
  - 実行するときも、ひとりの長老が単独で対応するのは避けます。十二弟子たちの派遣のときも、70人の弟子たちの派遣のときも、イエスは必ず二人ずつで派遣しました。長老たちはその人の前に行き、代表の長老がその人の目をしっかりと見つめて、「汚れた霊よ。主イエス・キリストの御名によって命じる。この人から出て行け。二度とこの人に入るな。」と命じます。
  - 「しかる」という表現が示すように、これは汚れた霊を叱責することであり、命令することです。祈りではありません。叱る時には、相手の目をじっと見ることが大切です。
- ⑧ 信者は、聖霊を受けているので、完全に悪霊に支配されるということはありません。
- 不必要にサタンや悪魔を恐れるのではなく、まず神を恐れること、神に信頼することが、何よりも大切です。
- ⑨ 信者で悪霊に悩まされるケースは、悔い改めていない罪がある場合があります。とくに信者同士、兄弟姉妹を心の中で赦さず、さばいている場合に、その心の中の苦い根を足掛かりにして、悪霊が信者の心を支配しようとします(Ⅱコリ 2:4~11)。福音の光を輝かせないようにするためには、信者相互の愛を破壊するのが一番だからです。
- ⑩ サタンや悪霊との戦いでは、神の武具をとっての祈り、特にとりなしの祈り(エペソ 6:10~20)が大切です。悪霊の追い出しが一番に来るのではありません。
- ⑪ 悪霊の追い出しをするには、日頃から祈りと断食を通して神からの力を受けることを経験しておく必要があります。
- ⑫ 断食の意味は、自分の身を戒める、苦しめることです。苦しみを通して、神の前にへりくだり、自分の力に頼らず、神の恵みに期待することです。断食をしていることを誇るとか、何かしら自分の霊的パワーが高まっているとか、そんなことを言う人がいたら、偽信者か、よくても霊的幼子の可能性が高いので警戒してください。
- ⑬ 断食と祈りは、密接な関係にあります。悪霊の追い出しに限って断食が必要というわけではありません。断食を伴う祈りが記録されたケースは、新約聖書

では次のとおりです。

- 神に仕える生活として・・・ルカ 2 : 37
- 異邦人のコルネリオが天使のお告げを受けたとき・・・使徒 10 : 30 (写本によっては「祈っていた」または「断食をしていた」)
- 宣教で設立した教会ごとに複数の長老たちを選んだとき・・・使徒 14 : 23

#### (4) 悪霊の追い出しに関する注意事項

- ① 悪霊の追い出しを実際にできたからといって、すべてがイエスの弟子ではありません (マタイ 7 : 22)
- ② 偽預言者たちは、羊のなりをしてやって来るが、うちは貪欲な狼です。実によって彼らを見分ける必要があります (マタイ 7 : 15~20)
- ③ 悪霊の働きとして主要なものは、偶像崇拜、霊媒、口寄せ、占い。このようなことをする者に近づかないことが第一です。そのような人から悪霊を追い出そうなどと、こちらから安易に近づくことは、危険です。聖書では、そのようなことを命じたり、勧めたりしてはいません。
  - 霊媒：ヘブル語でオーブ。口寄せと同じ意味で使われる。死人の霊を呼び出して吉凶を知らせる (申 18 : 11、イザヤ 19 : 3)。死人の霊は地中から語ったり、霊媒に宿ったりするとされた。霊媒は「さえずるように、ささやくように」語ったと言われる (イザヤ 8 : 19)。
  - 口寄せ：死者の霊を地下から呼び起こすと信じられ (申 18 : 11、イザヤ 29 : 4)、神に尋ねるべきことを死人にうかがう者であった (イザヤ 8 : 19)。
  - 霊媒や口寄せを求めることは、主からの離反であり、律法では禁止されている (レビ 19 : 31)。サウル王はこの禁止に違反した (I サム 28 : 7~8)。マナセ王はこれを好んだ (II 列 21 : 6)。ヨシヤ王は、彼らを除き去った (II 列 23 : 24)。

#### 5. 救いへの道備え

- (1) 罪人は、肉体にある間、サタンの支配下にあります。アダム以外の人、生まれながら罪人として生まれてきたのであって、その人自身がアダムと同じ罪を犯したわけではありません。
- (2) しかし、すべての人を罪の中に閉じ込めたのは、神です。神が私たちをサタンに引き渡したのです。最初の人アダム一人のせいで、すべての人が罪人とされて、死ぬべきものとなりました。
- (3) 実は、これは人を救うための、神の知恵です。神は、これと同じ論理で、今度は別のひとりの人 (メシア) によって、信じる人すべてを死からいのちへ移す道を用意しました。それが、次のテーマ、人の救いとメシアの関係です。